

茨城大学工学部 令和元年度 工学部 FD 研修会報告書

茨城大学工学部教育改善委員会

1. 開催日時

令和元年 12 月 25 日 (水) 13 時 00 分～15 時 00 分

2. 場所

工学部 N4 棟 小平記念ホール

3. 参加者数 (参加者数/構成員数)

全体 (120/161)

機械 (20/24) ; 知能 (16/22) ; 電気電子 (9/20) ; メディア (10/14) ; マテリアル (7/12) ; 生体分子 (13/16) ; 情報 (17/23) ; 都市 (16/19) ; 数理・応用 (12/13)

教育改善委員会 (敬称略, 順不同) : 横木裕宗 (委員長)、西剛史 (司会)、海野昌喜 (SPOD フォーラム報告)、一ノ瀬彩、清水淳、和田達明、鶴野克宏、芝軒太郎、清水年美 (欠席者: なし)

4. 配布資料

4-1. 機関別認証評価で求められる内部質保証システムと工学部の教育改善の取り組み

4-2. SPOD フォーラムの報告

5. プログラム (司会: 西 剛史 教育改善委員会 FD 担当)

13:00 ~ 13:05 開会の辞 (副学部長・教育改善委員長 横木 裕宗)

13:05 ~ 14:15 基調講演 『機関別認証評価で求められる内部質保証システムと工学部の教育改善の取り組み』

全学教育機構 畠田 敏行 先生

14:15 ~ 14:35 教育改善に関する話題提供 『SPOD フォーラムの参加報告』

教育改善委員 海野 昌喜 先生

14:35 ~ 14:55 本学教員によるフリーディスカッション

14:55 閉会の辞 (学部長 増澤 徹)

6. 実施内容

【基調講演】

『機関別認証評価で求められる内部質保証システムと工学部の教育改善の取り組み』

全学教育機構准教授 鳥田 敏行 先生

全学教育機構の鳥田先生より以下の話題が提供された。

- ✓ 認証評価で求められる内部質保証システムへの取り組み：認証評価の概要；認証評価で要求される内部質保証の概要と本学の取り組み（シラバスに基づいた授業の設計，教員によるシラバスのチェック，授業アンケートと成績データに基づく授業点検，科目ごとの成績分布の確認とマネジメント）。
- ✓ アクティブラーニング（AL）の現状と課題：ALの定義；ALの目的（不確定な未来に対応できる能動的学習者の育成）；AL効果増大につながる学生のDPに対する理解の深化の重要性；学生アンケート結果と問題の指摘（ALの形骸化，教員間でのALに対する認識の相違，学生を動機づけるための工夫，グループ学習時におけるタダ乗りなど）。
- ✓ 学生の成績動向：GPAの変化の様子から眺めた卒業，進学，留年，休学，退学等の状況。
- ✓ 学修成果の調査結果：卒業時と卒業後3年経過した学生に対するアンケート結果ならび本学学生を採用した企業に対するアンケート結果。

✓

本講演に対して以下の質疑応答があった。

Q1：著しい成績不振者への退学勧告等の実施について。

A1：本学では成績不振者に対する退学勧告を行っていない。退学勧告による早期の進路変更の促進が学生の利益につながるという意見と受け入れた学生は最後まで面倒を見るのが大学の責任であるという意見が拮抗している。

Q2：教育改善に対して今後教員がすべきことは何か？

A2：工学部の取り組みは先端的である。今後も継続的な活動が期待される。全学教育機構は授業改善に役立つデータ提供等の要望に対応可能である。

Q3：教育方針に従わない学生が不利益を被ることはやむを得ないのではないか？

A3：厳しい教育は修了年数を長期化させる一方，緩い教育は学修成果を低下させる。現時点で適切な解決策を見つけるのはむづかしい。



【教育改善に関する話題提供】

SPOD フォーラムの報告（教育改善委員 海野 昌喜 先生）

教育改善委員の海野先生より SPOD フォーラムへの参加報告があった。

- ✓ 開催日程：令和元年 8 月 28 日(水)～30 日(金).
- ✓ 開催場所：愛媛大学.
- ✓ 開催目的：学生の豊かな学びと成長を支援する実践的な力量をもった高等教育のプロフェッショナルの輩出.
- ✓ 講義紹介 (1)『小グループ・ペア学習を取り入れた授業デザイン』：授業の必要性・考え方・方法を学び、理解させることを目的としてグループ学習やペア学習を取り入れた授業設計法。個々が学んだことをグループ内で教える協同学習を行う.
- ✓ 講義紹介 (2)『理工系講義形式授業における発問を中心にすえた授業デザイン』：学生が自ら問題意識や学ぶ意味を問うことで学習の動機づけを行う授業設計法。周到的な授業設計と発問の準備が必要.



(3) 参加者全員によるディスカッション

参加者による以下の質疑応答があった。

Q1：教育改善に対する過度な要求は負担を増加させ続けている。教育改善のゴールはどこか？

A1：小さな負担で PDCA サイクルを効率的に回し、継続的な教育改善を行う必要がある。

Q2：卒業した学生に対するアンケート結果を学科ごとに集計したものはないか？

A2：全学教育機構に要望すれば対応可能。



以上
文責：清水 年美